

社会的構築物としての相撲：報恩古式大相撲の事例を巡って

著者	タブレロ フランシスコ ハビエル
会議概要（会議名，開催地，会期，主催者等）	会議名：日文研フォーラム，開催地：国際交流基金京都支部，会期：1996年6月11日，主催者：国際日本文化研究センター
ページ	1-21
発行年	1997-02-15
その他の言語のタイトル	Sumo as a social construction
シリーズ	日文研フォーラム；86
URL	http://doi.org/10.15055/00005711

第86回 日文研フォーラム



社会的構築物としての相撲

— 報恩古式大相撲の事例を巡って —

Sumo as a Social Construction



フランシスコ・ハビエル・タブレロ

Francisco Javier Tablero

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄

● テーマ ●

社会的構築物としての相撲

— 報恩古式大相撲の事例を巡って —

Sumo as a Social Construction

● 発表者 ●

フランシスコ・ハビエル・タブレロ

Dr. Francisco Javier Tablero

慶応義塾大学総合政策学部訪問講師

Visiting Lecturer, Keio University



1996年 6月 11日 (火)

発表者紹介

フランシスコ・ハビエル・タブレロ

慶応義塾大学総合政策学部訪問講師

Dr. Francisco Javier Tablero

Visiting Lecturer, Keio University

1959年、スペイン・マドリード生まれ。1982年、マドリード・コンプルテンセ大学哲学・教育学部卒業。1989年、東京大学教養学部総合文化研究科文化人類学専攻博士課程入学。1992年、マドリード・コンプルテンセ大学 (Cum Laude) 哲学博士号取得。1994年、東京大学教養学部総合文化研究科文化人類学専攻博士課程終了。1995年より慶応義塾大学総合政策学部の訪問講師として現在に至る。

主な著作等：

Parentesco y organización del sumo en Japón, (Microfilm)
Ediciones de la Universidad Complutense de Madrid, Madrid,
1993

“Transgresión, Integración y Catarsis en la lucha japonesa del sumo,” *Revista Española del Pacífico*, Año III, N. 3, Enero-Diciembre, Madrid, 1993

“Toros y Sumo : Análisis comparativo de dos ritos nacionales,”
Actas del III Congreso Internacional de la Asociación Asiática de Hispanistas, Tokio, Junio 8-10, 1993

「相撲に見る協会と共同体」 *Journal of Chung-Ang Folkloristics*,
Korean folklore Research Institute, Chung-ang University, Seoul,
December 1993

“Cultural Nationalism and Ethnic Identity in Japanese sumo,”
American Anthropological Association, Washington, D.C., Nov,
17-22, 1993

何よりもまず、今日、私が日文研フォーラムで話す機会をつくって下さった尾本先生、準備をして下さった臼井さん、そのご尽力に深く感謝いたします。

相撲は、時代の変遷、社会的変化、政治的影響に従います。

この明白な観察は、ほとんど認識されてきませんでした。相撲は、その周囲との依存関係から離され、純粹で自然、かつ不変な対象として、文献資料の中で理解されてきました。相撲は、太古の昔に由来する《隕石》のように、存続したも

のとして研究されてきたのです。

独立した存在としての相撲を維持するために、重要な概念は、伝統です。伝統文化としての相撲は、それを推進する関係者だけではなく、相撲研究者、学術研究者、マスコミや外交関係者によって、明示されてきました。

無論、この考え方は、政治的意味合いにおいて、非常に有益です。連続性の考えを強固なものにするだけではなく、支配的文化とのあらゆる共犯関係を隠すためです。伝統は、変化の重要性を軽視し、相撲を揺るぎない位置に置き、社会的現実とのつながりに関する研究を断念させます。

この流れは、日本における相撲についての文献作りを完全に支配し、政治・文

化的ナショナリズムの必要性和融合します。

とはいっても、相撲が、古い伝統であったことはありません。その出自は、都市文化における、社会の最下層の娯楽です。鎌倉時代では、盗人、子女誘拐者、浮浪者、恐喝者と同列の扱いです。

伝統は、現存する資料や、既に存在しなかったり、想像された資料を駆使した選りすぐった過程において、獲得されました。その昔からの性格を強調するため、に役立つものすべては、はっきりと目に見える形で、授けられました。

選択の過程にはまた、意図的な忘却も含まれていました。理想像と矛盾するものや、新しいアイデンティティを強調するのに役立たないものすべては、視界から消され、忘却のかたに追いやられました。

明治四二年（一九〇九）、国技という新しい役割において、相撲はその出自を切り捨てる必要がありました。もし、伝統となりたければ、その起源をどこか別の所に求めなければなりません。豊作を願う清めの儀式に、頃合な起源が見つかりました。皇室との提携は、社会の底辺とのつながりを、永遠に浄化してくれます。

相撲を取る者は、《怪物》でも巨人や女であるわけがなく、横綱の位置づけに見

られるように、神であり、最低限《強い武士》か《力・士》でなければなりません。

その実践は、勝負を単に見せるのではなく、神聖なる儀式となります。ゆくゆくは、娯楽の世界に別れを告げることになるのです。現在では既に、伝統文化となってしまったのですから。

私の最初の観察もまた、道具、飾り、紋章、服装、儀式、清め、数え切れない身体的な動きを検証することに、知らず知らず向けられました。その他に、あまたの《通》たちが、相撲の謎に関して、微に入り細にうがった多くの説明を無償で提供してくれました。その様々な解釈は、時間がたつにつれ、不信、深い疑惑の念を誘発していきました。その一例は、これから私が申し上げたいことの中で、浮かび上がってきます。

手刀

私はフィールド・ワークをしている時、手刀にまつわる情報を手しようと思いました。私は、こうしたことに最も通じていると言われる、親方の一人を選びました。

私が受けた説明は、概ね次のようなものでした：「相撲界で、とても古くから

ある感謝の形である。右手の動きは天、大地、最後に懸賞を受け取る人間を示す」。それから、相撲記者クラブに属する新聞記者は、それとは異なる説明をしてくれました。彼の説は、「手の動きは、四つの方向を示す」というものでした。また、刀で切ることを表す、との説明をしてくれた人もいました。

私は、同じ質問に関する説明内容の違いに納得がいかず、相撲の歴史の權威に相談をしました。それによりますと、手の動きは、勝利の三神、つまり、中央の天御中主神、右の高皇産巢靈神、左の神皇産巢靈神に捧げられる、とのことでした。その他にも、こうした動きは、農耕に関わる他の神々に捧げられる、とする別の説もあります。古い儀式であることには、皆、同意するものの、その意味を巡っては意見が多岐に分かれています。

私は研究を続けていくうちに、「手刀」はごく最近になって導入されたことを発見しました。ある力士が昭和一七年（一九四二）に、非公式に始めたとされています。その様が優雅で、威厳に満ちているということで、その力士を真似するようになりました。しかしながら、昭和四一年（一九六六）まで、それが義務づけられることはありませんでした。昭和四一年とは、あまりにも最近のことで、過去から神々がやってきて、Hobsbawnの有名な言葉を思い起こさせてくれます。彼

はこう述べています：『古くからの伝統と呼ばれるものの中には、かなり新しく、時として作られたものもある』。

神前結婚

相撲以外で、別の例を挙げましょう。神前結婚は、私の論点を説明する一例です。

神前結婚は、日本では伝統的な結婚式だと考えられています。（千年以上も続く儀式であると思われます）。しかし、日本の結婚式のスタンダードとなるのは、かなり新しいことです。神前結婚が行われるようになったのは、明治三三年（一九〇〇）、当時の皇太子が神前結婚をしてからです。明治時代以前には、めったに神社で結婚式が挙げられるようなことはなかったとされています。相撲におけるように、こうした儀式の革新の裏には、新秩序の象徴として、皇室制度を使いたかった、明治政府の政策が存在していたのです。神前での儀式は、キリスト教の結婚式のアナロジーとして役立ちました。天皇を神道の伝説の中に決定的に位置づけることで、何世紀もの間隠れていた、日本の《真実の》秩序を回復させたのです。

古式大相撲

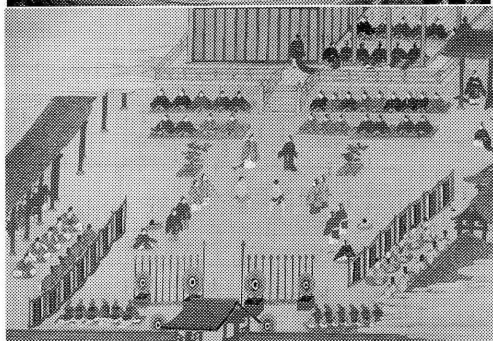
同じような目的を持つ、シンボリズムや文化的装飾の使用は、相撲の中では多

1. 古式大相撲と相撲節会

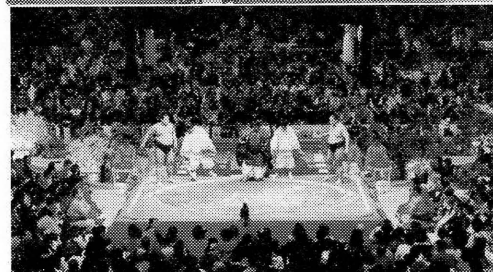
①



②



③



く見られます。ここでは、平成七年（一九九五）二月五日に行われた《古式大相撲》での儀式の事例を取り上げたいと思います。その分析は、シンボルをいかに操り、存在しない過去との虚構のつながりを拡げていったのかを、理解させてくれます。その目的は、目に見える形で、連続性を想起させることです。

古式大相撲は、昭和天皇に捧げる、『報恩古式大相撲』の儀式として開催されました。昭和天皇は、二〇世紀における相撲の合法化にとって重要な存在でした。主催は、報恩大相撲実行委員会、協力は、財団法人相撲協会、昭和天皇崇敬会でした。一二〇〇年前に行われていた相撲の再現として、マスコミに伝えられました。

ここでは、古式大相撲が行われた舞台の全体が見えます。この古式大相撲は、平安時代の相撲節会はこうであったのではないかと描かれた絵巻をもとにしています。

しかしながら、この絵巻は明治時代に作られたため、平安時代の相撲節会の忠実な描写であるのか、または、相撲の歴史を明治時代の先入観で変えてしまったのか、正確に裏付けすることはできません。（相撲を題材にした版画の中には、明らかに想像の産物であったものもあります。）

古式大相撲と一致しない点が、二点あることに、すぐ気づきます。まず、とりおこなった期日です。相撲節会は七月、七夕の日に開催されたのに、古式大相撲は二月に行われました。

次は、平安時代に行われた相撲節会が宮内内の庭で行われたのに対し、古式大相撲は国技館で聞かれました。古式大相撲の観客の存在は、相撲節会が平安時代

の天皇と宮廷人のためだけであった、その閉鎖性と矛盾するものです。

全般的に言って、古式大相撲は、現在の相撲と相撲節会の儀式を一致させようとする、多大な努力の結晶です。その結果、現在と古いと想定される様相が混成されています。相撲節会の舞台を手本にしているにもかかわらず、現在の相撲をそのまま残した部分もありました。例えば、平安時代には土俵は存在しなかったのに、古式大相撲では存在します。どうしてでしょうか？

国技館では、土俵は床の下に収納することができます。国技館が相撲以外の他の催し物に貸し出される時には、土俵は収納されてしまいます。古式大相撲の場合もそうしたら、より相撲節会に近づいたことでしょう。しかしながら、実際には土俵は、まるで平安時代にも存在したかのように、そのまま残されました。というのも、土俵は、現在の相撲において、最も神聖なるものを象徴する要素の一つであるからです。現在のところ、靴を履いて土俵に上がることはできません。女性に至ってはもう、土俵を触ることすら許されません。神聖なる土俵が汚れてしまうからです。

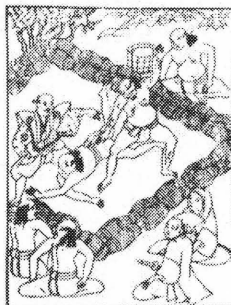
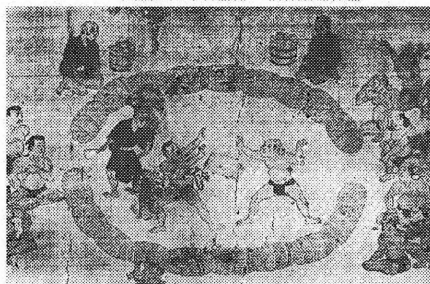
そうはいっても、土俵は比較的新しいものです。相撲を取る場所は、江戸時代初期の頃は、明確に定まっておらず、偶発的なものでした。基本的には、『大方屋』

と呼ばれる、相撲を見物しようとする人たちが周りを囲んで作る人垣が、現在の土俵の代わりでした。

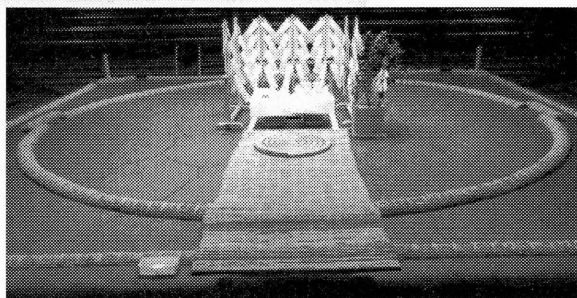
2. 土俵の変遷



まだ土俵がない時代の様子——取り囲む人垣が土俵



※経済通覧「土俵」の巻、昭和10年、昭和11年の土俵のありさまを収める土俵



しかし、江戸幕府が再三に渡って相撲を禁止したため、見物人と相撲を取る者たちを離す境界線の設置は、必要に迫られました。相撲を取る場所は、当局に認められるために、統制され始めました。俵を間に置くようになり、一七世紀後半には最初の土俵が生まれました。

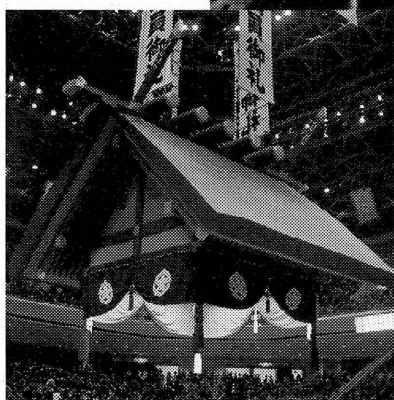
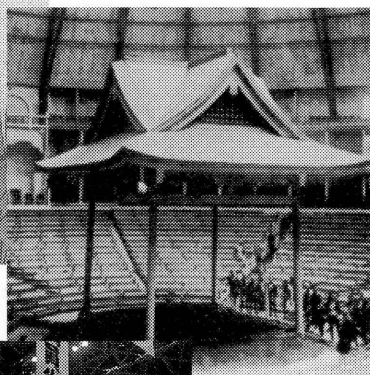
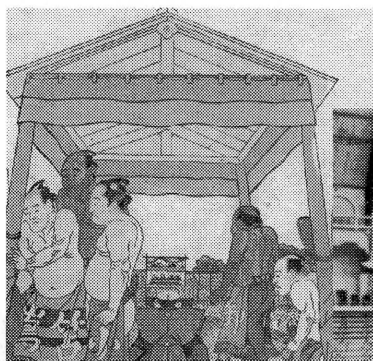
一八世紀には、様々な形態の土俵が試されましたが、確固たる均一な土俵ができるのは、江戸末期まで待たねばなりませんでした。

卑俗な出自を忘れる必要から、寛政三年（一七九一）吉田追風に、当時の将軍・徳川家齊の上覧相撲のために、『方屋開』を考案させることになりました。

この儀式は、その後、明治天皇臨席の下での儀式の中で、また作り上げられ、後年写真で見えるように土俵祭りとして、さらに作り上げられることになります。

神聖性は、江戸幕府による禁止令を乗り越える必要性から生まれました。宗教の中に何かを発見することは、相撲を行う許可を得、禁止令を受けずにすむ合法的な手段となりました。古式大相撲において、土俵をそのまま残すことは、やっとの思いで獲得した神聖不可侵の雰囲気を保証することにつながりました。

3. 館から吊屋根へ



吊り屋根もまた、古式大相撲の儀式の間ずっとありました。もちろん吊り屋根も取り外すことができるのですが、そのまま残しました。どうしてでしょうか？土俵と同じように、吊り屋根も宗教性と古さの雰囲気醸し出すのです。

もちろん、この吊り屋根は相撲節会においては存在しませんし、明治時代に描かれた絵巻にもその存在はありません。

吊り屋根の出現は、かなり新しいことです。二〇世紀の前半、《館》または屋根は、次第に関心事となっていきました。その形式も変遷しました。

簡単なもの（小屋根）から、より洗練され東洋色が際だつ《入母屋》のようになりました。

昭和六年（一九三一）以降、皇室との決定的な提携を模索し、伊勢神宮の屋根を模倣する、吊り屋根に変わりました。

昭和二八年（一九五二）、観客やテレビ・カメラの邪魔にならないよう、ケープルで天井に吊り下げられることになりました。

また、古式大相撲では、土俵や吊り屋根だけがそのまま残されたものではありません。現在の職業相撲の構成員である、力士、行司、審判、呼び出しが相撲節会を模倣した役割を果たし、そこにまるで歴史的な連続性があるかのように見せま

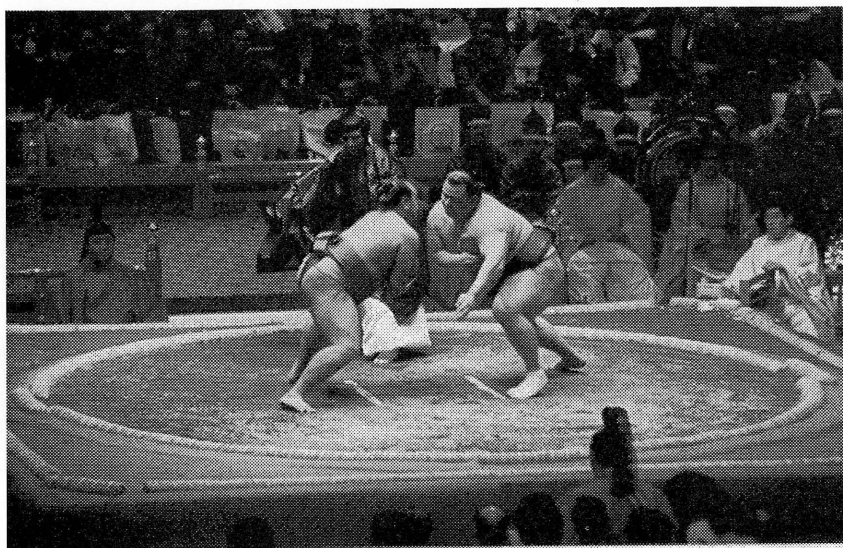
した。雅楽演奏だけが唯一、相撲協会の関係者の手によるものではなく、専門家の助けを借りました。

まず、現在の力士達が相撲人を模倣しました。

しかしながら、相撲人は、相撲を職業としてはいませんし、相撲部屋に住んでいませんでした。彼らは毎年、強制的に徴発されたのでした。それにまた、取り組みは、現在の勝負制度に沿うものでもありません。当時は、仕切りも立ち会いもありませんでした。現在のようなまわしをつけておらず、《とうさぎ》と呼ばれる、形も素材も異なるものでした。その結び方もまちまちでした。それにもかかわらず、古式大相撲では、過去に存在していたかのように、そのまま使われていました。そしてまた、明治四二年（一九〇九）に義務づけられた大銀杏髷もそのまま、相撲節会の時代の髪型を尊重していません。

相撲節会では、取り組み時の進行役に当たる人物がいませんでした。先に倒れた者が敗者となりました。しかしながら、古式大相撲の取り組みでは、現在に倣って判定が行われました。行司が、現在幕内で行われているように、立ち会いを指揮しました。

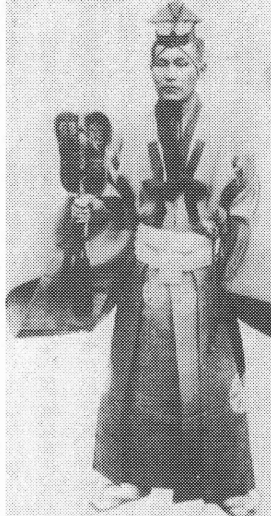
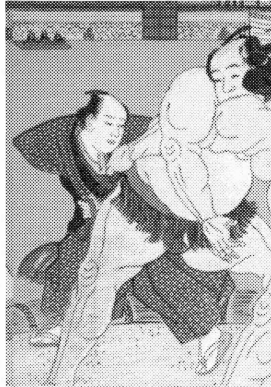
4. 古式大相撲の取組み



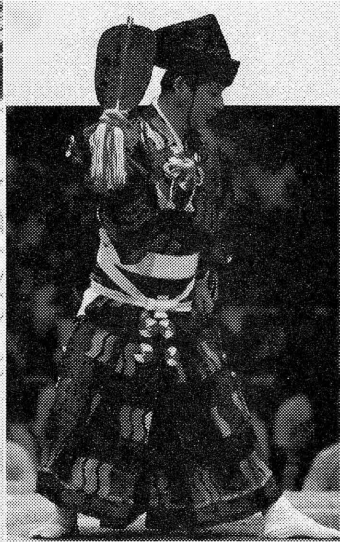
○童相撲に続き、古式による幕内取組(平幕)が14番行われた。写真は琴稲妻(左)と久島海

5. 行司の装束の変遷

現在の行司の装いは、明治四二年（一九〇九）に国技館が建設された後、皇太子の訪問を前にして考案されたものです。それを機に、行司の役割に威厳を与えることになり、それにふさわしい装いを探しました。



十七代木村庄之助（明治43年5）



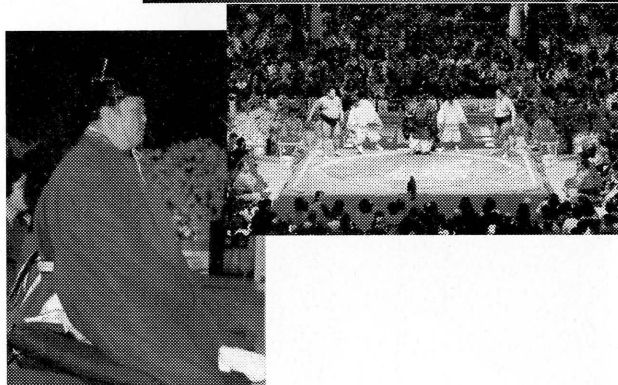
それ以来、行司は足利時代の烏帽子や直垂をつけることになりました。その結果威厳あるものとはなりましたが、時代考証で何世紀かの誤りが生じました。古式大相撲では、これを訂正することになりました。行司は、相撲節会における近衛次将の出で立ちを真似ていました。しかし、行司は、近衛次将の装いの特徴づける、弓も矢も持っていませんでした。その代わりに、その手は、江戸時代に大分入ってから導入された軍配団扇を持ったままでした。

そのあいまいさの極みとして、手刀がそのまま行われました。古式大相撲の時には懸賞のためではなく、橘と夕顔の花を受け取るためでした。しかし、相撲節会の描写においては、相撲人たちは立ち去る時、その花を髪に挿して行きました。それも、行司から手渡されたのでもなければ、ましてやそれを受け取る際、現在、行われている手刀を切ったわけでもありませんでした。

また別の問題は、審判にありました。過去に復活させるために、審判の問題はどうしたのでしょうか？その答えとして、彼らに烏帽子をつけさせました。相撲節会には審判に当たる者がおらず、唯一真似できる人物は、宮廷の庭に座っている《出居^{いでい}》でした。

審判はえんじ色の《すおう》をつけ、いつもと同じように土俵下に陣取りました。審判の人数は、江戸時代に審判が生まれて以来、変化してきました。昭和五年（一九三〇）審判が土俵下に座り始めるようになった頃、その人数は五人と定

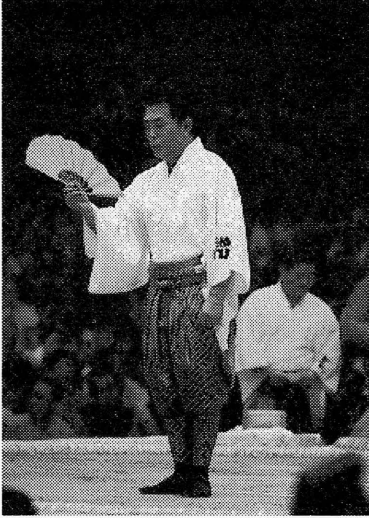
6. 古式大相撲での審判の装束



められました。この規定が最も新しく、古式大相撲でも、この人数が採用されました。

相撲における呼び出しもまた、比較的新しい役割です。呼び出しという言葉が最初に記録されているのは、江戸末期のことで、最終的に確立されたのは一九世紀後半のことです。江戸時代初期の頃のその役目は、行司の役目と区別がつかま

7. 呼び出しと古式大相撲での呼び出し



呼び出しの琴二と克之が当時の「囃名」の役

タツツケ袴と呼ばれるその興味深い服装は、江戸時代には専ら旅装として用いられたり、動きの多い下人が着けたもので、ポルトガル語のカルサオに由来するとも考えられます。しかし、古式大相撲では、呼び出しは烏帽子をかぶり、白い服装で現れます。

呼び出しの誕生は、土俵の出現と共にやって来ました。つまり、力士の名を呼び上げたり、土俵を作ったり、その世話をしたり、太鼓を叩いたりする人手が入で呼び上げられました。

この日には、また別の儀式がとりおこなわれました。例えば、三段構え、神相撲などですが、これらもまた同様に、今まで申し上げたように、非連続性の観点から分析することができます。

古式大相撲は、新しい儀式を設定するための実験でした。この分析を通してみると、相撲における多くの儀式は、実質的に、望ましいものの集合体であり、望まないものを消去することで生まれました。出羽海理事長は当時、こう述べています。

「色々説はあるのですが、それを取捨選択して、一つの形にしたわけです。これを今後の基本にするつもりでいます」。

結論として

相撲節会を思い起こすことと、それを現在の相撲と合体させるために、混合させることは別問題です。まず、相撲協会が独占している相撲は、国技の名称を継承していくためにも、『古くからのものであること』を必要としています。しかしながら、もし相撲節会を、従来語られてきたように表現すれば、そこから得るイメージは現在の相撲とはかけ離れてしまいます。その代わりに、常に現在から端を発しながら、相撲節会との虚構のつながりを探すのです。様々な儀式と結びつけ、色々なシンボルを挿入し、登場人物を他の登場人物にすり替えたりすることで、現在の相撲が古来から存続しているように見せるのです。こうして混成された儀式に、『古い』または『古式』という冠がつけられます。

発表を終えて

何年も東京に住みながら、京都に戻ってくることは爽やかな気分です。京都自体は、そんなに変わっていませんでした。多分、変わったのは私の視線でしょう。東京大学在籍中に読書を重ねたことで、絵葉書や観光に現われる京都ではなく、国の文化財保護政策によって守られ、再構築され、想像された京都が私の目に写りました。

初めて京都を訪問した時、ツアーバスで可視スポットを次々と廻ったため、京都の街は小さいという印象を持ちました。今回、小さく感じたのは自分自身でした。もう観光するのはやめ、ホテルから京都動物園まで歩いたりして、長い一日を過ごしました。映画館の看板を見たり、公園で中国人親子が体極拳をやっているのを観察しました。偶然出会ったメキシコからの留学生とハーブティーを飲んだり、バーチャル京都のある電話会社でインターネットを使ってサーフを楽しみ、最後は動物園で珍獣も見ました。ゆったりと時を感じる経験豊かな一日でした。

東京への帰路、「今日の京都は本物の京都だった?」と夢うつつで自問しました。



日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがひ」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 曩七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊びー拳を中心にー」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像ー現実と幻想ー」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性ー恵信尼の書簡ー」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元 .4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋ー都市社会の自由とその限界ー」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性ー猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りにー」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元 .8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に來た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」

⑮	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑯	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールス王伝説における主従関係 の比較」
②8	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②9	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情ー古典から近代までー」
30	3. 3. 5 (1991)	ウィーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 ーゲオルグ・マイステルの旅ー」
③1	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立 大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都ーケンペルの上洛記録」
③3	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラー・ネル大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④⑤	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 外国人研究員) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13 (1992)	李 栄 九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考－『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④⑧	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスタ (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ー技術移転をめぐるー」
④⑨	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLUTT 「伝説と歴史の間ー北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854～1919) とフリアー美術館 －米国の日本美術コレクションの一例として－」
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・来訪研究員) KIM Choon Mie 「近代日本知識人の思想と実践－有島武郎の場合－」
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選沢の象徴性 －旧身分文化との関連を中心として－」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選沢 : 10世紀の日本と朝鮮 －科举制度をめぐる－」
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り － 平安朝文学の特質－」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・国際日本文化研究センター客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・ カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と為作 -井上靖文学における『陰謀』-」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6.5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIW0 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6.6.10 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験-文学における日本人と上海」
66	6.7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見-王朝文を中心に-」

67	6. 9. 13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) François MACÉ 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6. 11. 15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6. 12. 20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1. 10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心－」
⑦1	7. 2. 14 (1995)	嚴 紹 璽 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」
⑦2	7. 3. 14 (1995)	王 家 驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4. 11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心－」

⑦④	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち－」
76	7. 7. 25 (1995)	崔 吉 城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sug 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦⑦	7. 9. 26 (1995)	蘇 徳 昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
78	7.10.17 (1995)	李 均 洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「一日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧⑧	7.12.19 (1995)	タチヤーナ L. ソコロワ＝デリュージナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8. 1. 16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑧2	8. 2. 13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3. 12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 - 近代批評における新語 -」
⑧4	8. 4. 16 (1996)	モーリス・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5. 28 (1996)	マーク・コウディ・ポルトン (ヴィクトリア大学・日文研客員助教授) Mark Cody POULTIN 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6. 11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7. 30 (1996)	シルヴァン・ギニャール (大阪学院大学助教授) Sylvain GUIGNARD 「筑前琵琶 - 文化を語る楽器」
88	8. 9. 10 (1996)	ハーバード E・プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国 東北民族学院助教授・日文研客員教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 - 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰」

発行日 1997年 2月15日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048

問合先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

1997 国際日本文化研究センター

■ 日時

1996年6月11日(火)

午後2時 ～ 4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

